In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

| | |
|---|---|
| Title | 古典文學の世界と研究のはいりかた |
| Author | 橋川, 時雄 |
| Citation | 人文研究. 6 巻 6 号, p.448-471. |
| Issue Date | 1955 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学文学会 |
| Description | |

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

# 古典文學の世界と研究のはいりかた

橋川時雄

**五月晴また宇治に來て己がじし老醜の賦しばしうそぶく**

**ながめたままに**　私たちに平和を、私たちにもつと光を―と、上林会長らが今年で四十年もさけびつづけた宇治同好会で、また来て語りあう機会をあたえられたことは、私の悦びとするところである。私は風かをる五月晴の空に浮ぶ一ひら一ひらの雲を追いながら、宇治の風景を賛美し、そこに染出された文学・思想・歴史を語りつづけるであろう、その雲には、私が三十年も住みなれた大陸中国の夢を載せている。〔註　この小篇は、一九五五・五・五、「宇治の五月風景ながめたままに」という命題で講演したおり、私がたずさえたノートである。これは私が歩んだ文学街道でたべた道草の一つである。〕

**むらさきの宇治**　私は中国の文学書をよみ、その世界に住んでいる老書生である。したがつて日本の歴史や文学には素人であるが、中国の古典からみた日本の歴史文学やそのほかの諸科学に及ぶことがあつても、それは許してもらいたい。私が京都東山の宅から、電車で、中書島・観月橋……と、いくつかの駅を通りすぎて、宇治にはいる。橋寺の断碑を読む、そして宇治橋にたたずみながらその風景をながめると、また読んだことのない源氏や『宇治十帖』をよみたどらせる心地がある。で昨夏は断碑物語の一くだりを諸君に披露した。この小題「むらさき」（紫草）というのは私の宇治第一帖で、前の「断碑」物語はこの後につづくその第二帖である。

両三年前の夏、私が橋寺の牡丹がさき綻びていたころ、そこの断碑を拓きにきた。側にいた老人に宇治の風景をほめる

と、『でも、人間の景色は、そうも美しくはない』と云つた。人は老いると、誰でも自分の醜くさから人間世界までも醜くく見えるらしい、自然の美しさ、若さに見くらべられて。――紫式部というざえ美しい女性は、毎朝雪隠にゆくくせがあつた。口さがな宮人たちが〃紫は朝糞まろ〃とそこの壁に落書してはつしやいだ。それをみた彼女はそれに筆をくわえて、下の一首に書きかえておいた。――紫は、浅くも濃くも染まるものを、〃あさくそまろ〃と誰か云うらん。』この故事にも、自然の風景が美しくも醜くも染まるのは、人間の歴史と庶民たちの営み（紫草の栽培や染織）などによることが知られよう。隋から唐にかけての染織では〃むらさき〃の栽培で、もつとも美しくかつ高貴な紫色を見出して、紫の文化をうちだした時代である。それがむらさきの藤原姓の彼女をして紫式部の名において源氏を書かしめた。その前において短歌にも「むらさき」の枕詞をつくつた。『宇治十帖』には彼女がながめた「むらさきの宇治」が写生されて居ろう。

**ノート(1)淵明と人磨**　一九二三年九月の東京震火で、『陶淵明』を出版まぎわで焼失した私が、十年がかりで、ぼつぼつその草稿を回復したころ、北京にやつて来た斎藤茂吉と、彼の人磨と私の淵明とを話合うたことがある。そのあと、茂吉がぬつと私の書室に顔出して、――私が三十幾世紀以前の亀骨文字や殷代文化の遺物や書物を買つた借金でうだつのあがらぬときである、彼は『万葉集』の「万」字はどういう意味かと聞いたのだ、『それは、ちよいとそこらで話されない』と私は笑つていた。「萬」字はサソリの象形で、それが聖徳太子や宿彌の像を入れた一円札の一万枚、十円札の一千枚と変貌して、今私を苦しめている「万」だもの。「万」字の歴史もそれだが、もつと酷いツツガ虫は、古代の穴居をおびやかしていた、それが私どもの手紙封筒のなかになお生きている。「その後悉なくいらせられ候や」と。彼とのあいだに「万」の字の話合いは数ケ月がかりで東京で解決したはずである。

**(2)中国詩歌での枕詞**　「枕詞」のことは、チャンバーレンが『枕詞（ピロウワード）および言語上の遊戯（エンド・プレー・アポン・ワーズ）』で書いたのは、私がまだ生れない以前の一八七七年西南戦争の時である。中国人が書いた日本古代史「魏志倭人伝」で、日本の条

里が中国江南からの移民たちの鍬さきで美しく開発されたことを知つた。山べに近い、田の規格が方形にならない、そこが「まくら」と小字されたものが多い。この考証は私の未刊稿「倭夷篇」に詳し。中国の詩田文圃にも枕詞があつていい。そのうちの考証「紫草について」は

一昨年関西大学東洋史学会で報告した。「桃源」は今は日本では酒の新しい枕詞になつていることを電車のなかでの廣告ビラで私は知つた。中国文学の語り物では、その書出しの「入話」がまくらである。

式部がもし、京都紫野あたりで紫草をつくつていた百姓娘で、大原女のごとくそれを紫染め屋にひさぎ、また染織工場にやとわれていたが、あとでえらばれて宮廷式部となつたものとしたら、その書いた源氏や『宇治十帖』はむらさきの濃淡がどう染めだされたであろう。『日本化粧考』を著した久下司から武蔵野をかけまわつて得た紫草の一鉢をもらつて、それを育てあげながら考えられたことである。紫草苑主人谷崎の新訳『源氏物語』の第一巻が出た、根分けしてその一株をたずさえて紫草苑主人をたずねてみたいと思つていたとき、紫草の甘根が虫に食われて枯れた。

**歴史と思想の破紋**　虫に食われて、まだ花を見ぬうちに死んだ紫草を、どういう詩句で葬ろうか、小説『紅楼夢』には「葬花」の場面が読まれるとて、『咄！むらさき姫よ。未だ花燭洞房を成さざりしは惜しむべきも、さつれ、児啼女哭を免れ得たり』の偈句でも、禅僧でない私としておはずかしい。いつか小庭に、上掲の句碑を刻もうかと思う、そして茂吉がくれた短歌と、私が中国で世話になつた胡適が私の妻に贈つた「新詩」なども附刻しておきたい。自然と人間の世界は文学では二つであつて一つ。自然の法則に従うところに人間世界は林のごとく静か、人間に愛でらる度合で自然物はその美しさをますが歴史や思想は進歩と変化をもとめるがために風のごと

春風掻拍棹郎頭、何処？　桃源誌路求。
字字文心今古恨、一占山口葬花愁。

〔続〕春風掻拍す、棹郎の頭。何の処ぞ、桃源、路を誌して求めん。字字の文心、今古の恨みあるにや、山口に一占して、花を葬むるの愁あり。

くきびしい。それを投影して、自然と人間の世界に破紋をえがいたが「文学」であると私は了解している。宇治にながめられる風景にも、人間の時代風潮が動かした破紋がえがかれている。でなければそこに綴られた詩句もない、そこに染めつきされた「むらさき」の思想模様もない。生物学者山本宣治が暴漢におそわれて斃れた宇治歴史の一ページも、書かれなかつたであろう。

(3) **鐵格子の窓** きびしい歴史をうつろわせた風景の破紋もまた美しい。鉄格子の窓から、さしこんで来た月が、ほのぼのと美しい、それに打たれた作者魯迅は『狂人日記』を書いた。その書きだしは、

今晩は、大変、好い月の光だ。

私はそれを見なくなつてから、もう三十年ばかりにもなる。今日は、見たので、気分が、何ともいえない爽やかさ――だ。

その作品が活字になつたとき、弟の周作人から、その一読をすすめられた。いくどかくり返し読みなおしてみた。

〔註 湖月抄の源氏に、式部も、ほのぼのと照り出した月をみて、写経を裏返しにその筆を進めたことが、書いてあつたけな〕それから私はこの小品になぐさめられることが多かつた。――

人間が人間を喰う世なりけり。しかと見たれば、疑うべからず。

上海における作者魯迅〔周樹人一八八一―一九三六〕の死は、数万の市民のざわめくなかを文学葬で送られた。ダーウインの『種の起源』を訳した社会科学者大杉栄が殺されたあと、『無産者生物学』を書いた山宣も殺された、でもその下手人は、古くさい春秋の筆法を以てしないかぎり、この両人がもつた生物学であるとはいえまい。

すべての自然革命は、

その形態の中に凝固されたものでなくて、たえず前進し、たえまなく変化している。

このミチューリン生物学の原理は、屈原・司馬遷・司馬相如・楊雄―陶淵明から『紅楼夢』の文学を評釈した詩句としても私どもに提供されている。桓根に菊という高等野菜が作られるに至つて、『菊をとる東籬の下、悠

然として南山を見る』とうたつた田園詩人淵明がでた。「采菊」とは、「春野に出でて若菜つむ」風情で、一枝の菊花を手にした蒼い顔の作者をしのばしめる句でない。私ども古典文学のしごと場でも、一般諸科学者が実行しているように、ひろく眺められるままにその素材をあつめ、考古考史的にその証言をかためる、といつた方法にもう修正されねばならぬ。魯迅文学のばわい、時代の政潮にあふられて、起承転結（きりきりしやん）と焉哉乎也（てんでこまい）することはやめて、深い渓間に香おりをふくめる蘭のごとく、自然界の歴史にも「陶汰」のきびしさにおののき、人間の愛護をうけるために媚びてほほえんだ『野草』時代があつたことを、彼の遺作と歴史のうちに読むことができよう。これは花を葬らせたるそれよりもきびしい、紫草の根をたべた小虫よりも、もつとひどい歴史台風が、あした咲く蕾におそいかかつている気象預報でもあるのだ。

**子どもの日と端午**　四月二十九日の「天皇誕生日」をすぎて五月にはいると、一日はメーデー、三日は「憲法記念日」、五日は「こどもの日」、八日は「母の日」と云つた系列で、さほど多くもない国民祝日が、このあたりに凝集されている。そこには今日の現実政治を投影して、自然の秩序をみだした盲点も見出だされよう。陰暦五月五日が端午の節句で男の子どもを祝い、三月三日がヒナ祭、女の節句であつたものが、「子どもの日」がもとの端午の節句にすることで男女平等をうたい、春季皇霊祭を「春分の日」、秋季皇霊祭を「秋分の日」、古暦法の用語で天皇や祖先の性格を書改め大臣のよび名は追放されないで、出世をあうる鯉のぼりのごとくはためいているのに、地震・雷と組みした親爺は戦犯者として罪されている。桃の花咲く河べに、いとも静かに人間の生殖と繁栄をうらない、また男の童や娘たちが、ロマンスを唱い、そして七夕祭祭りよりももつとあでやかに、私たちの唱うべき詩歌をもたせてくれた、諸工芸の妙技をヒナに造型してその妍をきそい、その上達を祈られた、……三月三日に、何とか考えてもらえなかつたか知ら。

〔註　詩の経典『詩経』でも桃の節句が詠まれる、〔三月三日の「上巳」は、上は尚と、巳は子と、古く同字に通用されて、「子を尚ぶ（こうぶ）日」であつた。〕のだから、この日こそ、「子どもの日」、その母体の「母の日、父の日」でもあつてほしい。

三月や五月の節句近く、百貨店をのぞいてみると、内裏ヒナ、追放をまぬがれた武者人形、その調度品などが、みごとに飾られている。これあるかぎり、六法全書はいくど書改められても、上巳端午の節句は健在である。人形も平和使節の役目をつとめる、これをしも古い歴史の残滓とはいえまい。

今の六法全書には、英文と対照した憲法を載せた本もある点で、世界で類例がない。それを憤る声も聞かれるが、げんみつに中国古典文化からみて、日本ではいまだかつて自国の文字と言葉とで自らの創意で憲法をもつたためしがない。

(4) **新詩とその作者**　私のとこに、胡適が書いた「新詩」の一首がある。

花辯児紛紛落了、
労伊親手收存。
寄与心上人、
当一封沒有字的書信。

・花びらが、ひらひらと落ちている、
何気なく、一ひらを手のひらでうけた。
この花びらを、あなたの手に持たせたい。
そしたら文字の無いこの手紙(ふみ)で、
春の歌心をあなたに伝えられよう、サヨーナラ。

「新詩」の作品には、どこか翻訳詩に見られる異国情緒がギザだというひともあろうが、そこには詠みぶりを新しくする作者の創意がくめる、国の文学を帰化人にゆだねたわけではない。私が江南に旅して楊子江に浮んだとき、船上で月をながみながら菜葉服の田舎青年が詩を吟じ、そのうちに、私の知つた聞一多・朱自清・俞平伯……たちの「新詩」の作のほかに、胡適の「四烈士塚上の無字碑歌」もあつた。

民国革命の前夜、楊禹昌・張先培・黄之萌の三人が、袁世凱に爆弾を投げて、死んだ。彭家珍は良弼に爆弾を投げて、彼を倒してから死んだ。民国になると、北京郊外の三貝子公園に「四烈士塚」が築かれた、その墓標の一面だけに四烈士碑の文字が刻まれたが、その三烈士の名は無字碑のままである。作者胡適はその墓下にあそぶ夢をみての作、

四烈士塚上的沒有字碑歌

他們是誰？　三個失敗的英雄！　一個成功的好漢！

他們的武器！　炸弾！　炸弾！
他們的精神！　幹！　幹！　幹！
――が、その四節ある初めの一つで、
この石の帽子をかぶつた人たちはいつたいどうしたモノか、
失敗した英雄の三人と、
成功した好漢の一人なのだ。
彼らのもつた武器は、爆弾だ、爆弾だ。
彼らの精神は、やつつけろ、やつつけろ、やつつけろ――だ。

その「幹！」を「抵抗だ」「前進だ」と訳されてもよい。

「新詩」の作者たちは、大胆に俗文学をして大雅の堂にのぼせ、『金瓶梅』『紅楼夢』など「誨淫の書」といわれたものを大学の教壇にのぼした。

上掲の「新詩」二首には、作者たちが、文学革命の道標の一つには「故事の排撃」をうたいながら、無字碑故事を「没有字的書信」「没字碑」と書いただけでとりすましている。故事の問題は白語文語の文体的外型のそとにあるところの、語言学的問題を超えた文学そのものがもつ本質のうちにある。彼らの行動には、そうしたことには眼を回らすひまもなく、やつつけろ、やつつけろと猪突するばかりであつた。そのころ北京大学でラテン語を授けていた講師辜鴻銘、あとに中国のタゴールとして日本をおとずれた詩人の彼は、いつも、自作の英詩をうたつた口で、そのまま漢詩に詠みかえて私に示してくれた。また中国小説史を講じた魯迅は、新詩はさほど作らないで、旧詩体の労作をやつていたはずである。作者には失望があつたとしても、文学や歴史には失望があつてならない、その文学革命を進行させた無字碑的業蹟は、いつまでも認めてやらねばならない。

**芸術を稱える五月歌**　むかし、中国はその世紀前三世紀ごろ楚の国から一人の偉大な詩人屈原を生んだ。彼は楚の懐王に用いられて憲法起草を命ぜられた、同僚がその草稿をぬすもうとした、これを拒んだことから讒言されて、王の信任を失つた彼が、その憤りを『離騒』の賦で書いた、三百七十余句をつずつた長篇である。この労作は後の作者をして中国文学史上の月桂冠的栄誉を彼にあたえた。

懐王の信任を失つた後の彼は、ふたたびその地位を回復できなかつた。追放の罪をうけて都落ちし、江南にうらおちぶれた三閭大夫の姿をあらわし、放浪詩人としていく篇かの名作を書いている。彼は亡びゆく楚国の運命を悲しみ、「懐沙」の賦をよみ石をいだいて今の湖南省長沙の近くにある汨羅（べきら）の淵に身投げした。土地の人たちはその五月五日を記念して、菖蒲刀をかざり、ちまきを流れに投じ、また競渡行事で彼の悲運の死を弔うてきたという屈原物語が、司馬遷の『史記』などにも読まれる。

いつたい、屈原が身投げした長沙あたりの五月風景は、夏の白い光をうけて、茂みこまやかで、じめじめするが青葉若葉をそよがす風におのずから人の歌心をさそう、この自然のうちに、人間の営み、社会の政治が進められたばわい、そこにきびしい時代歴史の栄枯の影がさして来なくてはならない。

〔註わが国でも、「夏子は育つ」の諺や「丙午生れの女性はきつい」という迷信がある。中国古刀の銘でも、丙午、丙丁の月日を刻んだものが多く見うけられる。『丙丁亀鑑』なんていう本さえいく部も書かれている。〕

屈原物語に伝えられる「懐沙」の賦も、芸術品でいうなら、戦国時代末期に製作された午の月午の日を銘うつた古刀と同よう鑑賞される「五月の歌」なのである。その古の「沙」国故城の外、その歴史に懐古されているが、そこには車や船や農具を造る老匠が登場して古木森々の林をながめ、この地方の民生とその繁栄が祈られた古沙国祝日にうたわれた歌詞である。その原作は大工の神をたたえた船大工や車造りたちの芸術祭歌でもあつたろう。

カンカンと五月の陽があの河あの沢にみちあふれている、　陶陶盂夏、
こんもりと茂る森林をながめて目じろぎしながら、　草木莽莽。
傷ましい思で、哀調をおびた歌を口ずさみ、　傷懐永哀兮、
とぼとぼ路を急いでいる旅びとが、　汨徂南土。
この江南の古国に、祈りをささげている。

『何びとの、おかしますかは知らねども、ただあ―りがたさに―、涙こぼるる。』――旅びとをよびとどめて、老匠が歌う唄、

『私たちの工場でも、円い型造りをするためには、まず方にした上で、その角を削ってゆくのよ。魯班さまが、お決めになった法度は今になったとて、変りはない。〃円きものは方の極致なり〃――この初本の道を書改めることは、書をよみ詩を詠みたもうあなたたち君子の学問でも卑下なさるだろう。』

刓方以為円、
常度未替。
易初本由兮、
君子所鄙。

アレ、かなたの浦べから競渡（ボート・レース）の歌声が聞えてくる。――

『斧ふれカンカン、陽も照れカンカーン、私とあなたは御門（ミカド）のとびら、朝にわかれて夜に逢う、あなたと私と相音頭なら、ヤレ恋の船こげ、こげ、オケ、オーケ。』

大工たちの経典『魯班経』〔木経全書の一〕の明刊本にも絶句体の詩句が書いてある、「懐沙」の賦とその句境はべつでない。浴衣地になる木綿の白帯がまぶしい光をはねかえして、川べをふちどっている五月の陽のなかに、「懐沙」の賦をさらしてみれば、こうも評釈される。郭沫若の「屈原」が紙くず籠みたいな切雲の冠をかぶった長十郎を舞台におどらせたとき、「平和の勝利にたいする確信と、人類文化の遺産にたいする尊敬の念をいだいている中国人民は、一九五三年に四人の偉大な世界著名文化人――中国の屈原、ポーランドのニコラス・コペルニグス、フランスのフランソワ・ラブレ、キューバのホセ・マルティを記念するようにという世界平和擁護委員会の提案をうけいれた。」との報告が郭沫若からもたされた、何というあでやかさ。このあでやかさは、私の文学のしごと場からはけつしてうちだせない。

私の物語は深入りしすぎた。ここらで薫風を腹一ぱいにふくませ、吹きながしている鯉のぼりをながめよう。その画にも詩句にもなる美の神々しさ、輝かしさ、逞しさ、ゆたかさで、限りない青空に何をささやき、何を光らしているのだろ

う。その風は「うた」である、風雅な声で無字の詩句を奏でている。〔註　風は、文学芸術の神を表徴した「鳳」にたいするあこがれにはじまる。詩の経典「詩経」では「国風」の風である、それは『日本書記』では「夷風（ひなぶり）」のうたである、国々の庶民生産の職場でうたわれた労働歌のうちに育てあげられた歌心である。〕この鯉のぼりにながめられる風情をうち出したところにわが歌人の創作した短歌のうちでもっとも完美なものがあろう。それは唐の詩人たちが仕上げした絶句文学とその句境とも手法とも一つに通ずるものがあろう。

(5)　おのがじしに　『史記』の屈原伝を読んだ私には、歌心はもたない宋儒たちが、最も典型的な忠臣とかつぎあげるまでもなく、また彼を人民詩人に肩替させるまでもなく、庶民の営み生産の職場で歌われた詩句を読むことができる。おのがじしに、文学を追求する私は、むろん横ばいする、私は甲に似せて、私は私なりの古典の穴を堀る蟹であつてよい。いつも北京で画家斉白石に蟹を書いて「文章は天下に横行す」の六字を題してもらつていた私は、むしろその横ばいすることを誇言してきた。その白石は今も百歳にちかい長寿で、健在である。国老としても珍宝がられているそうな。彼の出身は大工で「木人」の款印を用いた。長生術をきいたら、これをと持ち出した落花生の実を、私は一粒たべて吐きだした。そのとき贈られた彼の画室図の題句は、

余童子時、喜写字、祖母嘗太息曰、『汝好学、惜生来時、走錯了人家、俗云、三日風四日雨、那見文章鍋裏煮？明朝無米、吾児奈何？』及二十余歳時、常得作画銭、買柴米、祖母笑曰『那知今日鍋裏煮吾児之画也？』忽忽余年六十一、作客燕京、売画自給、常懸画于四屋、因名其屋日甑屋。依然煮画、以活余年、痛祖母不能呼、吾児同餐矣。

幼少のころ字を書くことが好き、祖母が嘆いて『お前は読書好きだが、この家の子として生れそこないだぞ。野良仕事にむかないのは仕方ないとしても、文章は鍋で煮て食べられないじゃないか。明日はたべる米がない。お前どうしたらよいのじゃ』と申された。二十になると、画を売つて暮した。祖母は笑いながら、『今日、お前の画を鍋で煮て食べてわけようとは思わなかつたわい。』

それから歳月は流れて、私も六十一の還暦の年を迎えた。北京に来て売画生活をつづけている、いつも画幅を貧しい住居の壁にかけているので、その室名に「甑屋（こめびつのいおり）」と命じた。私は依然として画を煮て食べている、そしてこの余生を送るであろう、ただ、祖母はとくに亡くなつて、その同じ鍋の画を食べられないが痛ましい。

この文詞は素朴、この「甑屋図」を贈られた彼の年に、今の私はめぐりあわせている。ここまで書いてきた

**屈原は憲法の枕詞**　私が評訳した『離騒』の賦では、秦始皇に招かれた博士たちが書いた憲法の歌である。屈原が実在した人物であつたか否かは、その評伝者司馬遷にも、その決め手がなかつたらしい。庶民に声をそろえてうたわしめる歌の憲法とみたら、「屈原物語」はその「枕詞」ともいえようか。

秦始皇はこの憲法歌を道標に天下一統の大事業をなしとげたが、その夢があまりに大きかつたので、頌徳碑を泰山に石柱を立て、その文字をきざまれないうちに、その大帝国はあいなく崩壊した。今もその無字碑が泰山の頂につつ起つている。そして漢の高祖が「大風起つて、白雲飛ぶ」とふるい起つて、大漢帝国を成立させた。

この無字碑を宇治の断碑と話しあわしたら一つの小説が書けよう。武部の『宇治十帖』はそれである。私の宇治物語もそれを試みようとして失敗作と聞いてほしい。彼始皇があこがれた三島の蓬萊国に不老不死の薬をもとめた「徐福物語」がある。その実これは鍬もつ開拓移民団の出あしをうたつたもので、日本でも紀伊に七曜の星座になぞらえた七つの墓がある。ほかにもこれをつたえた遺蹟がある。屈原にゆかりをもつ端午行事がわが宮廷に入つたのは、平安朝になつてからとき、渠山人（木村英一）から私に一絶を寄せてその和作をもとめてきた、つぎの二首を默句る。

和渠山人見寄二絶

風風雨雨綠新鮮、　為怨流年毎悵然。
姓白詩人名躑躅（つつじ）、　映山紅（やまつつじ）外北窓前。

六代風流談者鮮（すくなし）、　愧吾与壁立徒然。
何妨回眼判青白、　躑躅花酡落照前。

としても、それまでに徐福物語の後につづいた百姓や織姫の集団移民のあいだに口承されて素樸な行事となつていたであろう。そして詩歌文学が、百姓たちの営み、労働、それが一歳の生活行事、その民族の生殖生産の祭典に凝集されて開花するという私の持説が許されるならば、屈原は日本でも文学芸術の神としての性格があたえられてよい。でなくば、端午の節句といえば屈原を思わしめるほどに、狂歌師も「変屈原」としやれさせるだけに、私どもの生活文化に普遍されようはずがない。

(6) **始皇無字碑に続く** 戦国時代の後半期、横の東西に連盟する蘇秦の連衡派が動きだした。縦の南北に統合を策する張儀の合従派がおどつた。この両派が影をひそめたとき、後に秦の博士になつた作者たちが始皇をして一つの平和世界の夢をもたしめるべく、それは東西と南北の四方に放浪し、四極に浮遊し、つまりは不老不死の神仙国に通ずる構想であつた。方にしてかつ正しい一統政治を庶民たちにも謳歌せしめようとした創意から賦という詩体で書かれた、――が『離騒』の賦である。屈原の遺作と伝えたのは、秦帝国が崩れかかつてからのこと屈原が実在人物でなかつたとしても、楚の王族屈姓には屈原物語を行事にしたの型紙はそのまま私どもの国にはこばれた。葦原文化の草原を草分けして、みずみずしい瑞穂の国を呈現させてくれた。それが宇治の橋と橋寺とを取りまく風景を展べられるまでの歴史を記念する斷碑でも、その書体、その文句、また橋をふくめた寺塔の建築技術も、すべて隋唐からもたらされた型紙文化である。今の北京故宮博物院に遺一般庶民からもてはやされるだけの偉大な貢献を築いた歴史をもつ。屈原が懐王のために書いた憲法はこの『離騒』の賦のほかにはもとめられない。

その『離騒』とうたわれた憲法では、「法」の網にはかからない泥棒のはびこり、悪平等のデモクラーともいうべき政治が襲いかかつてきた時代におののきながらそれを「党人」の名において、至方至正の平和世界の破壊者を「讒佞」の名において、悪貨が善貨を駆逐する事象を「我を知るものなき美人香草」の名において、諷刺、抵抗、排撃、明るい五月晴のごとき一つの平和長久の世界への進行曲がうたわれている。

された扇画では、まつたく宇治の時代風景をほうふつさせる。それは豊太閤が茶水を汲んだという三ッ間も、橋柳も塔寺の営造配置もよく似たものである。聖徳太子の十七条憲法とてもまたこれしきの製作である。大化以前のわが国の文化は、彼にあつたものが型通りにその型体をくずさないで、その技術者の手で船乗されたことを、私は断碑物語でくわしく語つた。明六日は、平等院の鳳凰堂で創建当時の古風にかえすため「木造のはじめの儀」がとり行われる、私ども古典文学の世界でも建築考古学とはちがつて、復元工作は偽作者の子の筆すさびといいながらも、なお初歩入門の手びきとしてみすてられておらない。

**(7) 桃花源の村造り**　始皇が長城を築くために北から南から千百万の労働力が徴発されて、土盛り石運びに十幾年を継続したことも、けつして徒労ではなかつた。それを我慢した庶民は、「文学」というかたちでむくいられた。長城をめぐる悲哀物語がその長城の壁を崩さむばかりの哭声をあげてひろく伝えられた、それは万喜良の血となり、孟姜女の涙となつて、小説戯曲といわず文学の全野を、今もひたひたとうるほしている。――川田瑞穂『中国の文学』参照。

**詠鳳の歌はあがる**　橋寺がたてられたとき、どういう土つき唄でどういう人物が音頭とつていたかなど物語つていたら、はてしがなない。明日の鳳凰堂上棟式で、久しぶりに五月の晴空にあがる金色の鳳凰がちらちらと目のあたりにちらつく、ほうぶつされる、その方に私の話題をしぼる。

屈原の『離騒』憲法歌も無字碑に終つたあと、その文学を承襲した司馬相如は「子虚賦」と題する新しい憲法歌で大漢

そこから避秦思想を派出せしめて、焚かれた古典の復原工作と平行して、古詩十九首の新体詩がつくられたばかりでなく、その労働力は江南の開発にあふれだし、集団移住による郡県の僑置を進め、「桃花源」の新しい村造りをうたわしめた。それに協力した道士・沙門・隠士たちは、その村造りや寺造りの音頭取りとなつた、地固めの土つき車にかけた綱をひきながらうたつた音頭唄もまた織姫が七夕の星に悲恋をこめた歌声も、あとには美しい詩句に晶華された。

帝国の理想を祝福した。『離騒』の賦では西王母を夢の国とあこがれたが、相如の文学では卓文君という蜀の富豪卓王孫の出もどり娘とのあいだに美しいロマンスを伝えて、まつたく神格的衣裳をぬぎすててあざやかに作者未詳の時代を通りこしている。その作品の美しさは、その時代に造られた刺繍を思わせる、それを裏返してみた糸のはしりに人間の美しさが見られる、これが若返つた大漢帝国の憲法「子虚賦」である。相如の書いた憲法歌にこうしたエロテックな裏づけすることによつて、文学の分野においても人間の世界に開発の鍬がふるわれている。

相如が琴の名手でもあつたので、琴調を解していた卓文君をいどむために卓王孫に招かれた席で琴をひいた、壁のすき間から聞きとれていた文君は、相如の帰つたあと牆をこえて彼のもとに「夜奔」した、彼が琴調にあわせた歌詞に、後のひとが擬作した「詠鳳」の歌詞がある。彼らの「夜奔」と「詠鳳」とは二人の文学的業蹟を後の作者たちにしのばせるだけに終らなかつた。

(8) **老醜の賦** 私が若いころ、詩を解した芝蘭花校書(げいしゃ)に自作の対聯を贈るために、或る老儒に書いてもろうたとき、『この年寄に、こうした文句を書かせるなんて、お前も罪な男だわい』と、あざけり嘆かしたこともあつたが、今の私には「老醜」の賦をうたい、これを書くために六十の手習することだけのしごとが、残されている。万葉作者は、「二王」と書いて、「……テシがも」(手師、王羲之・王獻之の二王父子を師として手習したこと)の手師を助詞に詠むほどに中国文学がこなされていた。

読史記相如伝

還読人間未読書〔さすらいの旅びとの宿、しばしまた、相如の伝に心足らえり。〕

臥宣窓半緑扶疏。〔窓近く木木の緑の圧すありて、馬纓(ねむ)の花散る五月のまひる。〕

矯鶯何事解言語、〔ストリップする文君を見ずや君、わが歌に「性」の秩序はものか。〕

嗟我見挑賦子虚。〔うぐひすは花むなしきに来てなくを、「老醜」の賦われ詠まんとす。〕

(9) **裏返して書く** 相如の文学に表現された思想模様

は荒けずりではあるが人間的には美しい、その時代に造られた刺繍であると云われるならば、それを裏返して糸のはしりをみて、雕蟲篆刻、「新詩」を詠んだのが楊雄であろう。また古詩十九首に続くものであろう。私はいつもこの窓から古典文学をながめている。ところが今の私どもの宅の窓は内から外景をながむべく装飾されているが、それは中国では穴居の原始生活から司馬遷、相如までのことで、楊雄以後はそとからながめる窓であるよう改められるに至っていたのではなかろうか。司馬遷が書いた『史記』も、穴をほってその一部を石室に埋めた、文学からいえば書遺すための作品である。この穴窓のうらからながめねば、『大鏡』に「穴ほりて、いひ入れ侍りけめ」とあっても、何のことか判るまい。式部は写経を裏返して源氏を書いたといわれている、日本短歌も唐の絶句を裏返した新体詩ではなかろうか、俳句は中国の諸古典をくまなく裏返してみてあの小品に縫いなおした新詩ではなかろうか、平安時代の作者には、絶句をうたつた口でそれを短歌でも、たちどころに歌われたのである。また俳句の創意者たちが『論語』の助詞までも読みなおしていることが、吉川幸次郎『中国の知慧』に見ぬいて、その書扉にかかげた句に、

論語という物の諸家の文章にすぐれたるも、人をあつかふ論談のあだやかに、物語に心をふくめたれば、げにも聖人の教と聞ゆ。

——各務支考『俳諧十論』

相如の「子虚賦」の句に、其北則有陰林巨樹、□□章。〔その服注に、豫章大木、生七年乃可知〕と、活字にない木名を羅列してあるが、さすがに許六はその七年で大木になる「予章」を、予算してかかり、その猶子が京都に遊学する「入学賛」に、

本箱にまず成る相の若芽かな

——森川許六『風俗文選』

と詠みなおしている。また、金関丈夫『木馬と石牛』をひもどくと、「媛樹譚」に「デカメロン」の和漢民間説話に投じたエロテイクな物語について書かれている。そのうちにとりあげた『鳥有此譚の』作者金井由輔についても考証を詳らかにしている——この書名が「子虚賦」の役者を承襲している。金井由輔はすでに卓文君の「夜

奔」物語と「子虚賦」との距離が零であることを見究めている、すばらしい文学的識見である。

(10) **鳳凰かける詩魂**　この春私が訳して筑摩書房から出した馮至の『杜甫』は、近ごろの中国新刊書のうちで傑れた製作と定評されている、その著者はドイツ文学を専攻し、作者生活をつづけた人でもある、おのずと文学心の捉えかたにも、その表現の手法にも新らしさがある点で買われているらしい。平易に判りやすく杜甫の巨匠を小冊にまとめあげたお点前は敬服のほかない。が訳者の私にしてみれば、私の名において読者に提供するからには、著者の原意に忠実たるべき埒内において、私なりの染めつきをせざるを得ない。私の了解されてきた杜甫の詩生涯は、詠鳳にふみ出し、詠鳳に終止したとみてきたのに、著者は宋以後の章句儒のしきたりで、彼は九歳で鳳凰を詠じた処女作があつたが、今は見失われている。が彼の詩集では鳳凰を詩句にとり入れた箇処は六七十を下らない、と見ているので、彼の詩魂の捉らえかたと句歴の活かしかたに、私と著者のあいだによほど喰いちがいが出てきた。と云つて、私は彼の所論に抗議しているのではない。文学する世界では、一つの詩歌を評釈するにも、また現代学徒の製作を邦訳するにも、その作者と対座して、ともに話しあう、よろこびあう平等な立場であるべきだが、見識の高下だけはその評訳者の筆で染めつきされなくてはならない。

**隅田風情との見比べ**　宇治の初夏の空にハタハタと吹き流されている鯉のぼりは、江戸隅田川にはためくよりは、はるかに美しくきらめいている。というのも、鳳凰堂の屋上に翔ける詩魂と交響する絶句の詩境にひびく鳳凰の雅楽と、わが短歌文学が伝える鯉のぼりの風情とが調べあうところに、である。大唐帝国を詩の国たらしめた絶句も、晩唐から次第に下り坂となつた。にもかかわらず、今になつても詩歌のうちでのもつとも美しい定型的なものとしてその伝承を絶たない。宇治黄蘗山にあそぶものは、その関帝廟のみくじ札で占うてみるがよい、その解答は素樸な七言絶句で出てくる、それが読めないにしても、中国からもたらした遺物として見すてられない、引き返して路頭で辻占の昆布をしやぶつてみると、吉凶が俳句や端唄の句型で書かれている。ここに中国古典を母体としたわが文学の素性をも考えられよう。

宇治風景は何といつてもその河の水に美しさを持つ点では隅田と変らない。宇治に橋寺や宇治橋が建てられた大化の初めでは、それと同型体の隅田風景が呈現されていたことは、浅草寺の縁起にも伝えられる。それは戦災で焼かれた浅草寺の遺跡から白鳳時代の瓦や和銅開珍の発掘報告にも証言されている。その本尊観音像縁起は、淵明の曾祖陶侃がもたらした廬山白蓮社仏像伝説をそのままに伝うる点でも、橋寺の本尊に先行する、河は世界の万河に通ずる、大陸中国からの文化舶来は隅田は宇治に一歩先行したようである。でなくても後れていた歴史は考えられない。

(11) **話しあう文学**　俳句は短歌絶句の句境を、短篇小説（Shrt story）化したというよりも、フランスで発達したという―Conteしたものではなかろうか、その過程を知らすために芭蕉の『奥の細道』が書かれたと思える。と云つて、何だ、作者芭蕉が旅だつとき、すでにこの本の構想が出来ていて、型どおりに予定されたところに型通りの足あとをのこしただけの作品じやないかと、素気なく見すてられるべきたちのものでない。中国の作者でも俳句に興味を深めているひとも多い、その所見も聞いてみたこともある私には、文学史学といわず、諸自然科学の問題においても、一どは日本は中国の附庸としての場において話しあうことによつて、それぞれに特異な場が見出だされる。支那学には、西欧の宣教師たちが中国人たちと話しあう語言学的知識からふみだした歴史がある。中国文学講座のために存在する文学でない、私はほかの国の文学は判らないが、中国の文学におけるかぎりは、話しあう、歌いあう、そしてよろこびあう、ということが、その原始から本質的な大筋にもなつて、組成され、変貌さされ、発展してきた歴史があると、了解するものである。〔註ま近かな例でいうなら、同人増田渉は愛石の癖をもつ、彼が中国文学者でなかつたとしたばわいでも、彼と奇石を話しあうことが奇石物語『紅楼夢』を文学するしごとであろう。〕それができないならば、大学の中国文学講座はいつそ解消して、ほかの国の文学や、語言・美学・農学・工学など諸科学の分野に、適当な度合においてうけ持つてもらい、世界文学の一環として研究するよりほかない。

『伊勢物語』に在平業平が『名にしおば、いざ言問わん』とうたわれたころの隅田風情には、すでに一沫の俳味がただようているかに思えるがどう。やがて頭陀袋さげた檜笠の宗匠芭蕉が、李白「春夜、桃李園に宴する序」の「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客」とうそぶいて、その河べから旅立つた。その『奥の細道』が国文の教科書にはいつたころには、『むらさき粉におう、……』と隅田の競渡にも武蔵野の校歌にもうたわれた。そのあいだに宇治はといえば、台湾から運ばれたチーク材で黄蘗山の寺造りがあり、茶の栽培をみちびいて、宇治茶の伝統を加えたほか、さほど変貌がなくて今日に及んだ。

宇治も隅田も、ほぼ同じ時代に、ほぼ同じむらさきの濃度で染めつきされた、隅田のむらさきは、歴史という朱にうばわれゆくままに浅くなり、そして今日の美しくかつ新しい色合いの武蔵野風情を呈現した。それなのに宇治のむらさきはいよいよこまやかに、紫色がもつ美しさが、極度にこなされた時、式部の『宇治十帖』が書かれた、平等院の鳳凰堂に、詩人の眼からみれば詩魂翔ける鳳凰の姿が見られた。

(12) **古典のはいりかた** これは、私が紫草を研究したときにも考えられたことである。――染料紫草とその被染物の素材があてがわれたそれ以前のことはぬきにしても紫がもつ美しさを染めだすまでのことを、工場の機械と、人の手足の物理作用、被染物とのあいだに起る化学作用、そこに工作者の技術ぶりがはたらき、名人気質の思想を染めつき、媒剤としての水や塩灰の性質と作用などが加わる、こうした複雑した事象を考えただけで、いかに分析辨証の方法を以てしても書きおうせるものでない。文学作品の部面においても同ようで、伝統の章句や考証的手法のみにたよることは、もうよほど修正がみとめられてよいのではなかろうか。事実万葉作者がうたつた「むらさき」の枕詞についても、「むらさきの」と、におへる妹……心にしみて……、雲の林……に続くときは、紫色感覚の流動するまにまに作者の創意も思想も染め出されている。それが、粉がたの海……、名高の浦……、藤井の原……、藤江の岸……、藤阪山……に連がるときは、むらさき色の感覚がいざないだす創意と思想の

ほかに、紫草を栽培してはたらいている百姓、それを收穫して粉にする、媒剤としての塩をもとめやすい地点に設けられた工場とその作業風景までその句境を写し出している。「むらさきは」と居すわらせるとき、「灰さすものを」、と、染織の技術、その灰が椿の灰であることまでうたわれている。国文学者でない私がこうした分析をしてみるのも、中国文学のしごと場においては、一つの文字が一つの言葉であることが多く、いくつかの字義といくつかの時代思想をかぶつているために、その色どり染めつきを分析し、解明することは、染織工芸のしごと場におけると同じ度合において確かな証言によつてその説明を書くことは不可能、ということを自白するためである。

こうした事象の前に直面して、私に知られたことは、作者のしごと場にも群（グループ）があつてそれぞれの個性で話合うているように一首の絶句にも話合つた四人の群がある。で私は、淵明の詩とその歴史を書くために、まず彼の作者としての群と、彼の文学を造型した詩句のうちに話しあうた群とを、むらさく『南史』と『北史』の両部史書にもとめてみた。そしてこれを一聯の詩句とし、紫問屋にかかげた商標のごとく、それを道標におしたてて彼の作品を評釈し、彼の句歴を書くことにした。

南史・北史集句

○作物外游、未嘗行入郡。「あでやかにその作者グループにはわれ入らじ、山紫に春の花映ゆ。」――物外の遊びをなし、いまだかつて、行いて郡に入らず。」

○耽人間楽、不能飛上天。「この窓に夕陽さすころ、なお筆をすい、ゆく雲を追うてあり、今も。」――人間の楽みにふけり、よく飛んで天に上らず。」

むかしの漢学者が『司馬牛、憂ひて曰く、人はみな、兄弟あれど、われひとりなし』と短歌し、『春王の、正月、鄭、段をうつ』と俳句していた時代は去つた。文学は忘れた会話のうちにない、討論や紋切型の考証のうちにもない。

**兎がとび出した路**　同じむらさきの時代風景を展べた宇治隅田が、なぜこうもかわつた眺めになつたのか、詩が自然を作るのでもない、自然が詩を作るのでもない、人間の生活・営みの歴史が作つたものである。大化二年の正月、宇治橋が

できるころ、日本は大化改新で、首都の尊厳をつくろい、五畿七道の制を設けて、地方には国司、郡司、坊長、里長をおく、政治新制が見られた。それは唐の十道制度の州郡里にならつたもので、その政治と行政地域の改制が日本の歴史と文化の様相を一変させた。この歩みを前奏したのが聖徳太子の憲法、大宝律令の制定とみてよい。

それまでは、河が、淀川、宇治川や大和川など島山の国の河口が船で大陸中国から文化物を運び入れる港で、難波津で一たまりして宇治にはいるまでには隅田川の河口に運ばれていた。それが五畿七道に改制されると、各地方にうづまいた文化の船路は停止して、大和川河口から奈良、淀川河口から京都の二つの首都に通ずる水路だけが活かされた。これまで地方から首都に流れた文化は逆流し、地方で生産された物資も、蓄えられた労働力も、富も、租庸調のかたちで七つの陸路で、奈良に京都に運ばる、搾取されることになつた。でも宇治は幸に奈良京都のあいだにかばわれたので、その搾取のすそ分けで、平等院などの営造にめぐまれた、ともいい切れない。なぜなら地方からの搾取で、まず中央に首都の尊厳を中国の使節たちに引目をとらぬだけに造営されると、遠く地方にもそれを及ぼした政治を平安王朝時代に行われたふしもあるからである。それがつぎの時代から、その搾取にも、分配にも、その七つの陸上の道に動脈の硬化をおこしはじめた、その時宇治川先渡の武劇も演ぜられた。それからは、平等院屋上の鳳凰は「悪平等」の政治を嘲けり歌うために、皮肉の微笑をうかべながら、今の時代まで持越された。

**(13) 日本国史のコント**　大陸から投影した日本国の歴史文化をうたつた風景は、宇治ばかりに見られるのでない。三つ島の津々浦々、奥山わけて入いる細道に遺されている浦島太郎の竜宮物語にも読むことができる。

このあたりは、私が書いた「魏志倭人伝」の考証をたどつて筆を進めている。『日本書紀』景行天皇四十年の条には、その時代の東海道が東京湾を渡つて総房半島に上つたので、そのあいだは船で渡つた。船橋の道であつた。三島半島の走水には弟橘姫を祭つた神社がある、弟橘姫とは宇治橋のもとに祭られた橋姫と同じ性格をおびた女神であることも、考えられる。途方もない出たらめだと思う史家があつたら、その『日本書紀』の行文と

「魏志倭人伝」とをよみあわせてみることで、その書きぶりも用句も同じであることを知るであろう。

〔註　滝川政次郎「律令時代の隈田川界隈」（国学院「政経論叢」のぬき刷）が贈られてきた。私は法制史家の彼と話しあうことによつて、私の倭人伝考証のために補わるべき旁証資料がゆたかにされたることをよろこぶ。〕

宇治でもいわゆる船橋は、道の政治に切りかえることで、大陸文化の交流の水路をふさいだ歴史を記念するよび名であることは斷碑の文字にも刻まれている。が、宇治に染出だされたむらさき風景の思想は、もつと大らかでかつ美しい。ある王子が狩したときに兎がとびだした路から「宇治」のよび名がおきたという物語は、大化以後の宇治に起つたか。式部が書いた源氏も『宇治十帖』も思想の宇治にかかる枕詞「むらさき」である。この意味では彼女の源氏と同よう、弘法が書いた『三教指帰』もその時代の宇治風景、日本および世界の風景を写している。弘法の『三教指帰』は、司馬相如が「子虚賦」で、国は斉、秦、楚の三つに分れているが一つの「物」の世界、その世界には出もどり娘ではあるがみめよき姫文君がよばいしてきた、――今は道（神）教、儒教、仏教の三つの国に分れているが、それは一つの世界である、人間には誰もがもつ情の世界がある、その世界に君臨したもうみかどは、うるわしい女神の姿、老僧が大唐国に留学したときに読んだエロ本のなかから見出したもので、今になつても忘れえないあこがれをもつ。一文不知の尼入道よ、村の花ちやん（は）が美しいなと見ほれる、それが老僧がいうみ仏の顔なだよ。……と書いてある。私はいま物語る宇治風景も、その思想の美しさをうち出していることを諸君に判つてもらいたいために出てきた。そんな空海、滅法なことをいう大師ではない。大師さまの頭に濃糞（こやし）を塗るものだと叱られるかも知れないが、中国古典の窓からそう読めるのだから仕ようがない。古典というものには、いくら読みかえしても満ち足りることを知らないというのは、うそでない。

## ⑭　底なき玉の杯でない

私の司馬相如伝の文学評論は、空海の『三教指帰』を読むことからはいる。この本の初稿は『聾瞽指帰』で、彼が十八で書いたとか、二十八で書いたとか、著作年代が論議されているが、いくら彼でもそんな若僧で書ける代物ではない。浩翰な彼の全集をひもどいてみてもこれにまさるほどの労作は、私は

読んだことはない。

相如の「子虚賦」では、楚の子虚先生と斉の烏有先生がまずほら話を吹きあう、無是公が登場してその話をまとめたかたち。『三教指帰』では亀毛先生と虚亡隠士が話しあい、乞食坊頭の仮名乞丐(空海)がそのまとめ役を演ずる。この本には漢文で、また邦文で注釈されたものが多い、その五六本をくまなく読んでみたが、エロ本をよんで書いたとはつきり彼が云つているのに、それにふれての章句はなされておらない。兼好法師を作者としない『お伽草子』でも、

高野山で、半出家の僧三人が、ふと一所に寄りあうて物語をした。その一人の僧は四十二三ばかり、「まず拙僧が家出して出家した因縁を話さう、……

――『お伽草子』「三人法師」

と云つたよう、悲恋小説に書き改めている。さすがに、式部は少女のころ『史記』を読んでひとからほめられたという挿話があるだけに、その司馬相如伝をよく味読されているらしい、そして若い寡婦で相如のもとに夜ばいして妻となつた卓文君にたいしては、彼女がさびしい寡婦となつたとき、一しお閑情―物のあわれと人間のうるわしさ、なまめかしさ、そして、もつと光るものともとめられたであろう、それだけの「ざえ」(中国古典の知識)をもつていたはずである。〔註　満洲八旗の文学史を書いたとき、ある旗人邸から美しい明版の「酒令」を手に入れた、その一頁に、ざんぎり頭の武士が、脇差を前において、美しい娘にお酌させて飲んでいる、その図に「倭寇亦春情を解す」と題されて、「頭禿げたるものは飲め」と酒令されている。私はこの一コマの風情から、明代の諸記録のうちから倭寇作者の遺作を読みあさつて倭寇文学を書いた、中国事変で南京が落ちたころである。〕

むすび　このごろ新聞にも見えてくる『紅楼夢』という小説は、中国の源氏といわれているのは、いささか中国文学を蔑視したきらいがある。中国は清朝になつてから、古くは中国のヒナ祭りの原始にさかのぼつて考えられる女媧から出てくる「金陵十二釵」という十二美人を庭園「大観園」の舞台におどらせる「人間の世界」を物語つている、一ど読め

ぱそのなかにはいりこんでその世界に幻惑させてしまうほどで、「紅迷」のよび名もおきた。源氏にもあつたように、「誨淫の書」として当局から発行停止を喰つたこともある。その本の序を書いた乾隆時代の文人は、

むかし、「絳樹」という歌姫は、喉と鼻とで、同時に両つの歌をうたつた。また「黄華」という名書家は、左手では楷書、右手では草書で、同時に両つの手紙をかいた。と云われているが、『紅楼夢』もそうした文学的神技をもつた作者の手で書かれた。

と語つている。石の物語小説だもの、私には中央公園でザル碁を囲み、日暮れてはいわゆる紅迷のなかまと場末の燈謎で明日の吉凶をかけ合い、もどつてゆくほどに天下太平であつた北京で、一どこの小説を読んだことがある。今は人を殺すきのこ雲をながめながら、『紅楼夢』にきりきり舞せざるを得ないように、世は変つたものである。

私の宇治物語も、喉で屈原の『離騒』の賦、司馬相如卓文君合作の「子虚賦」、淵明の詩句をうたい、司馬遷の歴史物語、杜甫の詠鳳、胡適・魯迅……を語り、鼻で万葉作者を語り、詩歌俳句をうたい、右手左手をあやつつて、私の翰墨因縁を物語つた。――さて、次ぎの宇治第三帖では、どんな風景を私は持ち出すだろう。この話はこれまで。

**ノート(15)不在話下**　松枝茂夫は故里の山に羊を追いながら、『紅楼夢』の邦訳をやつてのけた。その全十四冊をもらつた私は、今その大観園を千里鏡と望きこんでいる、そこに眺められたままに、そこに顔出したものについて物語つてきた。この眺望は大らかで、はてしがない、つまり司馬遷が書いた『史記』の世界だと見究められる、そのおくに、もう一つ屈原が、『圓きもの、平和なるものは、「方」なる政治秩序の極致である』、と、司馬遷の肩膝をたたいて「五月」の歌をあげている。小野忍から武田泰淳の近作『風媒花』を贈つてくれた、私の千里鏡で照らすと、『史記』の司馬遷と直接話しあうているだけに、その思想は『紅楼夢』という二月の花よりも紅、毛三本足らない紅学――一画三曲巛を缺かない経学のやからには、この作者の創意はわかるまい。そのうちに松枝から奥野信太郎らと訳した『曹禺篇』（現代の中国文学全集その十三）を寄せてきた。曹禺の作品では、

『北京人』しか読んで居らない私には、彼の『蛻変』がよめたのがうれしい、これも私の千里鏡にすなおにおさまる、してみると、私のもつている古典文学の世界も、リアリズムの傾向にヒントを合わせていることだけは確からしい。というのは、私が国に引揚げることに決意したころ、邦人たちは見失われた「北京人」（一九二三年このかた、北京西南方の周口店で発見された化石人類の骨）のゆくえについて捜索隊をくりだして騒いでいた、私は「北京人」に何かの縁をもつ各国の人々の言葉に耳を傾けてそれを地図の上におとして透視図にした一つの夢で夢でない物語を試みようと、曹禺の『北京人』の続篇ではないが、これだけは書いておきたいと、ただ一つの希望で帰つてきた。今は京都東山の白羊詠帰舎の叟となつて、それを書いてみようとしたとて、北京で聞きしらべたことが何一つ記憶からよみがえつて来ない、あたりをながめわたすと、山むくげも、籬も白羊に喰われけり、――だ。ことしは羊の歳、淵明の「正月五日斜川に遊ぶ詩」に和した句は、

己未開歳且、　韶気我屋休。　門無松竹立、
坐作斜川遊。　緜緜旧年華、　事事付逝流。
一派瞰洛浦、　履底逐波鷗。　依稀古桃源、
森若登春邱。　邱上一懶叟、　妻曳白羊儔。
羊脚何可煮？　蟹臍久莫酬。　止酒因病耳、
延寿作吉不？　今朝且自得、　吾句写吾憂。
半杵新餅搗――則向鄰家求。

× × ×

〔註〕この作文は、ページを喰いすぎ、半分以上もけずりおとしたので、ちぐはぐなものになつた。読者諒焉。